200. 脳槽シンチグラフィー上の asymmetrical ventricular reflux について

東京医科歯科大学　脳神経外科
露無　松平　　岡田　治大　　菅沼　康雄
大畑　正大　　平塚　秀雄　　稲葉　穣

（目的）1964年 Di Chiro により初めて脳槽シンチグラフィーが脳背髄液循環動態の研究に応用されて以来，本診断法に関して多数の報告が見られ，主として正常圧水頭症の診断には最重要な検査法として確立されてきた．われわれも他の学会において放射性同位元素による脳背髄液循環動態について報告してきたが，最近ventricular refluxに著しい左右差が認められる症例を経験するようになり，われわれの探索しえた限りでは本所見に関して報告が見られていないので詳細に検討し報告する．

（方法および結果）最近の約3年間に経験した101例，115回の脳槽シンチグラフィー中，ventricular reflux のある症例56例について検討した．そのうち約40％の22例に明らかな左右差（われわれはこれを asymmetrical ventricular reflux と呼び，以下 AVR と略す）が見られた．うちわけは脳動脈瘤破裂後の正常圧水頭症（以下 NPH と略す）が13例でうち前交通動脈瘤が原因の症例は10例と大半を占めていた．またその他の原因の NPH が6例，脳腫瘍，内頸動脈閉塞症，脳梁欠損症が各1例であった．

（結論）AVR について，1）前交通動脈瘤破裂後の NPH に多く見られる，2）脳室の大きさの左右差，脳萎縮の左右差，脳室に影響を及ぼす腫瘍の存在，脳室出血の側，シャント施行例では脳室穿刺の側等が関与する，3）脳動脈瘤破裂後の麻痺等の神経症状における左右差と相関が見られる，4）NPH のある例では脳室壁の髄液吸収能の左右差に関係があると推定される，5）convexity flow の左右差とは無関係である．

201. Cisternography における後頭蓋窩のイメージについて

放射線医学総合研究所　臨床研究部
国保　能彦　　有水　昇
千葉大学　脳神経外科
牧　豊　　能勢　忠男

Cisternography において後頭蓋窩のイメージに関しては未だ十分な検討の報告はない．我々は，後頭蓋窩イメージの中心をなす cisterna magna については，年齢的な推移があり，2歳未満では正常児でも約半数に拡大像が見られることを報告ずみであるが，今回は，cisterna magna のイメージの大きさと activity の動態を各種疾患（アーノルドキャリ症候群その他）との関連において CAG や PEG など補助診断法と比較しつつ検討した．その結果，単に形態ばかりでなく動態が重要な意味を持つことを報告したい．

以上により各部における脳疾患の描出に際しては，従来より詳細に病変を知ることができた．

また欠点としては次のような面をもつ．

1．患者の固定がX線検査並みに厳密さが要求される．

2．均一性の維持が容易ではない．

Presented by Medical*Online